

会津地方における小麦「ゆきちから」の早期播種栽培

福島県農業試験場 会津地域研究支場
平成14～17年度福島県農業試験場試験成績概要
分類コード 02-02-18131667

部門名 普通畑作物—小麦—作期・施肥法・生育調節・会津平坦
担当者 渡部隆・渡邊洋一・山内敏美・齋藤正明・齋藤弘文

I 新技術の解説

1 要旨

会津地方における小麦の播種適期は9月下旬～10月上旬であるが、水稻の収穫作業との競合から播種時期が遅延して作柄が不安定となり、低収量、低タンパク質の小麦生産となっている。これを改善するため、耐倒伏性の強い小麦「ゆきちから」を用い、基肥に肥効調節型肥料を利用し、麦踏みで生育を制御することにより、従来の播種適期より10日早い9月中旬播種が可能となり、収量及び子実のタンパク質含量とも安定して高い栽培ができる。

- (1) 播種期を9月中旬に早めることにより、成熟期が早まり、収量及び子実のタンパク質含量が増加する(表1、図1、2)。
- (2) 標準施肥では収量及び子実のタンパク質含量の年次変動が大きい、肥効調節型肥料(LP40:40日溶出タイプ)を基肥に用いることにより、収量及び子実のタンパク質含量が安定して高まる(図3)。
- (3) 3～4葉期頃から10～14日おきに2～3回麦踏みすることにより、越冬前の過剰生育が抑制される。また、収量の年次変動が小さくなり、子実のタンパク質含量が安定して高まる(表1、図4)。
- (4) 播種時期を早めることにより、生育量が増加して、倒伏の危険度が増すが、「ゆきちから」は耐倒伏性が強いことから、倒伏は少ない(表1)。

2 期待される効果

小麦の播種適期幅が広がることにより、水稻との作業競合が緩和でき、小麦の安定生産が可能となる。

3 適用範囲

会津平坦部

4 普及上の留意点

- (1) 対象品種は耐倒伏性の強い「ゆきちから」とする。
- (2) 越冬前の生育量が多い場合、雪腐れ病の発生が助長されることから、適正防除に努める。

II 具体的データ等

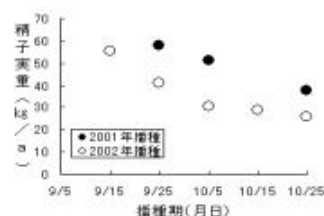


図1 播種期と収量の関係

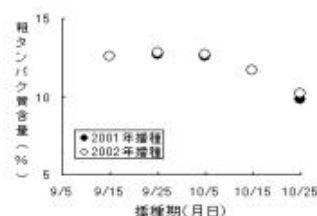


図2 播種期と原麦粗タンパク質含量の関係

表1 播種期と生育の関係(2002年播種)

播種期 (月・日)	麦踏み の有無	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	11月15日		3月20日		成熟期		雪腐病 発病程度 (0～5)	倒伏 程度 (0～5)
				草丈 (cm)	莖数 (本/m ²)	草丈 (cm)	莖数 (本/m ²)	稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)		
9.15	無	5.5	6.17	34.8	1117	20.4	1674	94.3	584	3	1
9.15	有	5.5	6.17	31.2	1017	17.0	1204	93.4	564	3	0.5
9.25	無	5.7	6.18	20.0	894	14.1	991	88.5	450	1	0
10.5	無	5.8	6.19	15.9	644	10.5	772	79.0	224	0	0
10.15	無	5.10	6.21	10.9	278	8.0	673	79.9	272	0	0
10.25	無	5.13	6.24	3.1	250	7.2	380	81.1	242	0	0

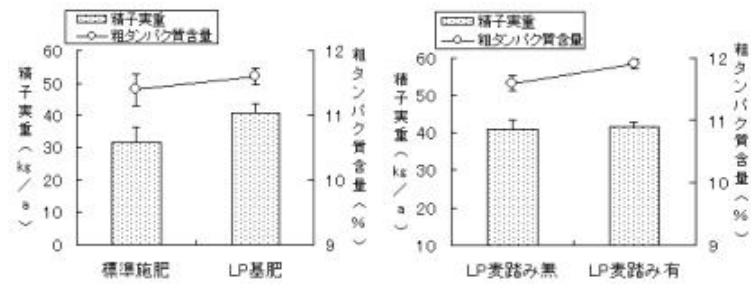


図3 施肥法と収量及び原麦粗タンパク質 図4 麦踏みの有無と収量及び原麦粗タンパク質含量の関係(2003~2004年播種)

注1) 図1、2及び表1の施肥法は、化成肥料を用いた標準施肥(基肥に化成肥料を資養成分で1.0kg/a、幼穂形成始期及び出穂期に収量を資養成分で各0.5kg/aを施用)。

注2) 図3の横軸の標記のうち、「LP基肥」は基肥に肥効調節型肥料(LP40)を資養成分で1.6kg/a施用した基肥一発施肥体系。播種期は9月15日。

注3) 図3、4の図中の縦線は標準誤差。

Ⅲ その他

1 執筆者

渡部隆

2 主な参考文献・資料

なし